北上川流域 集積の半導体産業

人材育成へ高大連携

岩手大特任教授が講演

水沢工

水沢佐倉河の県立水沢工業高校（日當仁己校長、生徒376人）で15日、岩手大学特任教授による半導体産業に関する講演会が行われた。電気科の2、3年生計59人が聴講。産業集積とともに人手不足が顕在化する中、高校生に地元企業へと目を向けてもらう狙い。生徒たちは、同産業の影響によって変わりゆく職業事情や、県内の半導体関連企業などについて学び進路選択の一助とした。

同大の「いわて半導体アカデミー地域連携講座」を利用し、同校として初めて取り組んだ。北上川流域を中心に同産業関連の集積が加速する中、人手不足が深刻化しており、高大連携による地域人材の育成を目指している。

講師は同大生産技術研究センターの梅木和博特任教授が務め、講演は各学年向けに2回実施した。2年生は「進路決定時の注意事項」、3年生では「県内の企業紹介」に重点を置き、グラフなどの統計データを用いながら講演した。

梅木特任教授は「進路選択後のミスマッチを避けるためには、常に自分で考え行動することが大切」と強調。

「数十年前と比べて社会の成熟が進んでおり、私が子どもの頃のような『10年後には高いビルが増える、飛行場が整備される』といった具体的な状態が想像できない時代になっている」などと解説した。

半導体技術の進歩により人の手に求められる仕事の形が変化していることにも言及。「何ができる人材なのか」が重要視される「ジョブ型雇用」に移行しつつあり、工業高校で学ぶ技術の大切さも説いた。

県内の半導体関連企業をまとめたマップも紹介。奥州市周辺には特に関連企業が多く、知識と技術を生かす場が身近にあることを気付かせ、生徒たちの進路選択へ新たな視点を示した。

2年の江川里翔（りしょう）さん(16)は「工業というと関東など都会のイメージが強かった。地元にも活躍の場が多くあると知り、これからしっかり目を向けていきたい。身に付けた知識や技術を、社会のために役立てられたら」と話していた。